

近代英語進行形の文法化

永尾 智

はじめに

I 3時代の「ルカ伝」

II 進行形出現数の変化

1 変化の全体像

2 変化の実態

3 近代英語進行形の特徴との比較

III 進行形となる動詞

1 自動詞・他動詞による分類

2 状態動詞・継続動詞・瞬間動詞による分類

おわりに

はじめに

現代英語の中で見る限り、英語の進行形は進行相を文法的に明示する操作詞として、機能、形式ともに単純明快な文法形式素といえる。しかし、機能、形式ともに全く異なるものの同じく相を表示する文法形式である完了形と比べてみると、進行形の歴史的成立過程が未だ十分に説明されていないことがわかる。完了形が、付加詞be/ haveのヴァリエーションはあるものの古英語期には形式的に成立し、近代英語期にはほぼ現代英語期と同じ機能を呈していたのに比べて、進行形の歴史的成立過程については諸説紛々としている。古英語期の進行形にアスペクトの意味はなかったとする見方が有力説の一つにある。Shakespeareが“*What are you reading?*” (*Troilus*: III-3) と“*What do you read my Lord?*” (*Hamlet*: II-2) のように進行形と単純形とを併用したことは、英語の進行形の歴史を語るとき、よく取り上げられる事例である。英語の進行形は、歴史上いずれの時代にも使用頻度が低く、近代英語期に一般化したとされる。一般化したといっても、現代英語においてさえ、その出現度は動詞句全体の5%程度に過ぎず (Quirk *et al.* 1985: 198)、その歴史的成立過程は扱いにくい問題の一つである。

本稿では、進行形構造の成立過程の中で“transitional period”となる初期近代英語期、進行形が急速な発達を始めた17世紀後半から18世紀、現代英語における進行形の出現状況を、現代英語の進行形に対する近代英語の対応状況を見るという視点で、3種の「ルカ伝」を使って比較、観察する。近代英語期の進行形の様相を、特に動詞の特性に着目しながら検討する。「ルカ伝」を使用するのは、福音書中で進行形の頻度が最も高いことによる。そのような観察を通して、進行形の成立過程を検討するうえで、さらにどのような点を検討していく必要があるのかを考えてみる。

I 3時代の「ルカ伝」

この課題に対処するため本稿では、時代の異なる3種の聖書の「ルカ伝」を使って、現代英語版で進行形になっている動詞句が、その150年前、300年前に進行形、単純形のいずれの形式であるかを①3テキストすべてで進行形である場合、②2テキストで進行形である場合、③現代英語版でのみ進行形である場合に整理し、出現状況の変化、および特徴を見る。現代英語版としてWorld English Bibleを、初期近代英語版として欽定訳聖書 (King James Bible)、後期近代英語版として「リームズ・ダウエイ聖書・チャロナー改訳版」(Rheimes-Douay Bible, Challoner revision) を使用する。

本稿で使用する資料は、Project Gutenberg eBooksのウェブ・サイトからダウンロードした、現代英語資料のWorld English Bible (以下、WEB)、初期近代英語資料の欽定訳聖書 (King James Bible (以下、KJB)) と「リームズ・ダウエイ聖書・チャロナー改訳版」(Rheimes-Douay Bible, Challoner revision (以下、RDB)) である。このうちWEBについて、資料を掲載するウェブ・サイト (<http://ebible.org/>) の資料解説には次のような指摘がある。

The World English Bible is based on the American Standard Version of the Holy Bible first published in 1901, the Biblia Hebraica Stuttgartensia Old Testament, and the Greek Majority Text New Testament. It is in draft form, and currently being edited for accuracy and readability.

聖書英語から現代英語の実例を取り出して比較するには、米国版聖書でいえば、The Revised Standard Version (1946-52) や The New Revised Standard Version (1989) を使用することが多いが、本稿が聖書本文自体に関する研究精度を高めることを求めるものではなく、むしろ現代英語の日常表現にできるだけ近いものを求めるものであることと、上記の電子テキスト使用可能性とにより、本稿では、WEBを現代英語テキストとして選定することにする。

寺澤ほか (1969) によれば、「チャロナー改訳版」とは「リームズ・ダウエイ聖書」の改訂版で、新約は1749-72年にかけて5回、旧約は1750年と1763年の2回改訂され、KJBを参照して読み易くしたものである。1810年にアメリカ人カトリック教徒によって公認され、いく度か改訂され、カトリックの公認訳として現在も使用されるものとされている (寺澤ほか 1969: 50-51)。また、永嶋 (1988) は、「リームズ＝ダウエイ聖書」は原典ヘブライ語・ギリシャ語から訳出されたものではないので、今日の学問的立場からすれば2次的価値しか持ち得ない。(永嶋 1988: 107) と述べている。しかし、この「2次的価値」とは、英訳聖書の原典との比較研究上の価値のことであり、本稿が眼目とする日常表現の拡散状況の観察という立場においては、「2次的」どころか「1次的」価値を認めることができる。Project Gutenbergではここで取りあげるテキスト原本の出版年をc. 1750としている。すなわち、ここで扱うRDBは、KJBの出版から約140年後のものであり、初期近代英語末期のテキストである。

このように、3テキストは、1611年のKJB、1750年のRDB、1901年のWEBと、それぞれ約150年間隔を置いたテキストである。

II 進行形出現数の変化

1 変化の全体像

3テキストの進行形出現数をまとめると表1となる。本稿では現代英語の進行形に対する近代英語の対応状況を見るという視点をとることから、WEB出現数と全出現数とを分けて考えることにする。そこで、

表1では、WEBに現れない事例数をカッコ表示する。出現総数は、WEB出現数が100例、全出現数は115例である。

WEBでの出現数100例に対応する箇所で行形となるのは、RDBで31例、KJBで15例である。このうち、RDBとKJBの双方で行形となる、すなわち3テキストとも進行形となるのは11例である。また、WEBとKJBで行形となるものは4例、WEBとRDBで行形となるものは16例、WEBのみで行形となるものは69例である。

表1 3聖書の進行形出現数（（ ）表示は、WEBに現れない事例数を示す。）

進行形が現れる 聖書	KJB RDB WEB	KJB RDB —	KJB — WEB	KJB — —	— RDB WEB	— RDB —	— — WEB	計
進行形の出現数	11	(2)	4	(0)	16	(13)	69	100 (15)

3テキスト間の出現数の変化を見ると、WEB出現数では、KJB：15例、RDB：27例、WEB：100例と増加している。全出現数ではRDBの比率が上がって、KJB：17例、RDB：42例、WEB：100例となる。増加状況は約150年間隔で2倍程度ずつ増えている。ただし、初期近代英語末期のRDBでの増加状況は、Rissanen (1999) の言う、1700年頃までに進行形が動詞組織内でアスペクト表示機能を確立したという見方を後押しするほどの増加ではない。

2 変化の実態

本節では、表1で示した進行形出現聖書群について、表の左から順に行形が現れる文法的特徴を整理する。節の種類、動詞の時制、主語の人称と特徴、進行形が示す意味について整理する。

2.1 WEB、RDB、KJBとも進行形である場合

3聖書とも進行形となっている11例のうち、主節で現れるものは6例、副詞節で現れるものは3例、関係節で現れるものは2例である。

(1) (Luke: 1-10)：主節で現れる例

WEB: The whole multitude of the people were praying outside at the hour of incense.

RDB: And all the multitude of the people was praying without, at the hour of incense.

KJB: And the whole multitude of the people were praying without at the time of incense.

(2) (Luke: 9-42)：副詞節で現れる例

WEB: While he was still coming, the demon threw him down and convulsed him violently. …

RDB: And as he was coming to him, the devil threw him down, and tore him.

KJB: And as he was yet a coming, the devil threw him down, and tare him. …

(3) (Luke: 11-52)：関係節で現れる場合

WEB: … You didn't enter in yourselves, and those who were entering in, you hindered.”

RDB: … you yourselves have not entered in, and those that were entering in, you have hindered.

KJB: … ye entered not in yourselves, and them that were entering in ye hindered.

副詞節3例はいずれもas等で導かれる時の副詞節で、主節に対して時間的枠組みを与えるものとなって

いる。しかし、共起副詞による枠組み設定はない。なお、(2)では、KJBで“a + ...ing構造”が見られる。

11例は全て過去形であり、主語が3人称、人間である点もすべて共通である。主語の単数・複数の違いによる相違はない。使われる動詞は、washとuntieの2例が他動詞で、残りはすべて自動詞である。(3)でenterが自動詞として使用され続けているのは、OEDによればラテン語の影響である。なお、(4)ではteachが“preach”の意味で使われる自動詞用法となっているが、teachが目的語を伴って他動詞用法として現れるのは、(5)に見られるようにRDBになってからである。

(4) (Luke: 13-10)

WEB: He was teaching in one of the synagogues on the Sabbath day.

RDB: And he was teaching in their synagogue on their sabbath.

KJB: And he was teaching in one of teh synagogues on the sabbath.

(5) (Luke: 20-1)

WEB: It happened on one of those days, as he was teaching the people in the temple and *preaching* the Good News, ...

RDB: And it came to pass, that on one of the days, as he was teaching the people in the temple, and *preaching* the gospel

KJB: And it came to pass, that on one of those days, as he taught the people in the temple, and *preached* the gospel, ...

11例のいずれの場合も、各動詞が表す行為がその時点で継続していることを表している。これら11例だけを見れば、進行形が示すアスペクト特性が1700年までに確立したというRissanen等の見方は首肯できそうだが、次節および次々節では、KJB、あるいはRDBで単純形による対応をしている場合もあるので、それを見た上でなければはっきりとしたことは言えない。

2.2 WEBとKJBで進行形である場合

WEBとKJBで進行形となる4例は、主節で現れるものが2例、副詞節、関係節で現れるものがそれぞれ1例ずつある。特徴的共起副詞はない。

過去形と現在形が2例ずつある。主語はすべて3人称であるが、4例中3例は環境が主語に立っている。主語の単数・複数の違いによる相違はなく、動詞はすべて自動詞である。4例のうち1例は自動詞teachで動作の継続を示すが、残り3例は、(6)に示すように現在形で2例1例、過去形で近接未来を示している。

(6) (Luke: 23-29)

WEB: For behold, the days are coming in which they will say, 'Blessed are the barren, ...

RDB: For behold, the days shall come, wherein they will say: Blessed are the barren, ...

KJB: For, behold, the days are coming, in the which they shall say, Blessed are the barren, ...

2.3 WEBとRDBで進行形である場合

WEBとRDBで進行形となる16例のうち、主節で現れるものが8例、副詞節で現れるものが6例、関係節で現れるものが2例である。副詞節で現れる6例はいずれもas、またはwhileで導かれる時の副詞節で、主節に対して時間的枠組みを与えるものとなっている。共起副詞として、2例ではWEBでstillが、RDBでyetが、別の2例でnowの共起がみられる。ただし、継続状況の指示を支えてはいるが、これが時間枠を与えているかは定かではない。特に(7)では、KJBがwas comeと完了相で対応しているため、未完

了相のための枠組みとはなっていない。

(7) (Luke: 19-37)

WEB: As he was now getting near, ... the whole multitude of the disciples began to rejoice and praise God with a loud voice for all the mighty works ...

RDB: And when he was now coming near ..., the whole multitude of his disciples began with joy to praise God with a loud voice, for all the mighty works they had seen.

KJB: And when he was come nigh, ... the whole multitude of the disciples began to rejoice and praise God with a loud voice for all the mighty works ...

なお、(8) では、KJBで“a + ...ing構造”が見られる。

(8) (Luke: 8-42)

WEB: for he had an only daughter, ... and she was dying. ...

RDB: For he had an only daughter, ... and she was dying. ...

KJB: For he had one only daughter, ... and she lay a dying. ...

16例中15例が過去形である。主語は16例とも3人称であり、15例で人間が主語となっている。主語の単数・複数の違いによる相違はない。動詞には、teachとpreachの他動詞が1例ずつ現れるが、残りはすべて自動詞である。なお、2例でteachの自動詞用法と他動詞用法が共存し、いずれの用法においてもKJBでは単純形となっている。

16例中11例では、各動詞が表す行為がその時点で継続していることを表している。(7)(8)を含む残り5例では、状況が間近に迫っているという近接未来を表している。

さらにここでは、3例(この中には上記(5)を含む。)で聖書に特徴的な表現の一つとされる“it came to pass ...”で文が導入されている。この構文は、「文体上の理由からTyndaleによって作られたと考えられ」ている(橋本 1995:207)。3例ではこの構文によって時間的枠組みが与えられる。進行形のみはこの時間的枠組み付与機能を求めることは難しい。

2.4 WEBのみで進行形である場合

WEBのみで進行形である69例のうち、主節で現れるものが40例、副詞節で現れるものが10例、関係節で現れるものが8例、名詞節で現れるものが11例である。主節：従節での出現率は、おおよそ6:4の割合である。進行形を伴う副詞節を導く接続詞には、前節同様as、while、whenと原因・理由を表すbecauseがある。共起副詞による枠組み設定は、前節まで同様、特でない。

進行形の過去形と現在・未来形との比率は、2:1(46:23)である。現在・未来形23例のうち13例は、1・2人称主語である。過去進行形で1・2人称主語をとっているのは1例のみである。

動詞の自動詞・他動詞の別の比率はおおよそ2:1(48:21)である。前節までの状況に比べて他動詞の出現率が高くなっているが、それにしても自動詞は他動詞の2倍の出現率であり、頻度的にも決して低いとはいえない。

動詞の表す意味を考えると、各動詞が表す行為がその時点で継続していることを表しているものは40例である。状態、および心的状態が継続していることを表しているものは18例である。表される状況が間近に迫っているという近接未来を表しているものは11例である。進行形が示す意味合いの広がり方は、前節よりさらに大きく広がっている。

3 近代英語進行形の特徴との比較

近代英語期の進行形の特徴には、Rissanen (1999) で示された表2の①から⑫と、Strang (1982) が指摘した⑬から⑮を重要な特徴としてあげることができる。これらと本稿の用例における検討結果を対照的に整理すると、表2に示す結果が得られる。

表2 初期近代英語期進行形の特徴

Rissanen (1999) とStrang (1982) による 近代英語進行形の特徴	本稿での観察結果
①進行形が動詞組織内でアスペクト表示機能を持つのは1700年頃までに完了した。	①1700年頃までに完了したとすればRDBでは完了していたことになるが、3テキストについては、KJBとRDBの間というより、RDBとWEBの間に確立期があると考えられる。
②Visser (1973) が主張する「行動枠」としての中核意味については、進行形の必要条件と断定することはできない。	②副詞節で使用される場合に副詞節全体として「行動枠効果」を示していると解釈することはできない。しかし、副詞節での使用は20例で、主節での使用が55例あり、枠効果を全体的に感じることができない。
③進行形構造には <i>subjective/emotive force</i> がある。	③主語が人、ないしはイエス、主となる例では、 <i>subjective force</i> が感じられる。
④always, ever, continually等の副詞の共起によって、習慣的・反復的行為のニュアンスが表される。	④反復意味を表す副詞との共起例は皆無であり、特性の一つとして認めるのは難しい。
⑤状態動詞の進行形構造は一般的ではない。	⑤WEBのみで1例受身進行形の例があるが、これ以外に状態動詞の進行形は現れないので、一般的でない。
⑥初期近代英語ではon+V-ingはa+V-ingより少数。18世紀でもupon等、他の前置詞が現れることがある。	⑥on-Ving形は現れない。a+Ving形がKJBで2例ある。ただし、RDB以降は事例なし。
⑦動詞的タイプの名詞的タイプ駆逐は現代英語で起るが、17世紀でも、名詞的タイプが公的文書、教育的文書で見られる。18世紀中に名詞的タイプが非標準化する。	⑦⑥で見たように、事例は極めて少ない。
⑧I am to/I'm going to構造は、17世紀末には一般的になる。義務や意図の含意が初期の例でも見られる。	⑧be to構造が1例ある。そこでは、主語の意図の含意がうかがわれる。
⑨be about to構造は、初期の例でも計画的行為といったアスペクト含意を持っていた。	⑨本稿の観察対象には事例がない。
⑩未来進行形は16-17世紀には一般的ではない。現在進行形は、その行為が前以て計画されたものであることを、主としてmotion verbと共起して示せた。	⑩未来進行形は3例のみである。現在進行形による事前の行為計画の含意は、本稿の用例では確認できない。
⑪受身意味の能動進行形では、主語がinanimate、能動意味の場合の主語はanimateとなるのが一般的である。	⑪本稿の観察対象には事例がない。
⑫受身進行形 (The house is being built.) が現れるのは初期近代英語末期である。	⑫本稿の観察対象には事例がない。
⑬18世紀前期の進行形構造は、口語散文、従属節での使用が“truely at home”な使用感である。	⑬⑭主節での使用と従属節での使用の比率は55:45で、前者が若干高い。従属節への偏りや従属節での増加はWEBの段階で確認できるが、従属節が主たる使用環境であるとは言い難い。
⑭従属節の数自体は小さいが、18世紀から19世紀における進行形構造の増加は、従属節での生起数が増加していることが大きく作用している。	
⑮1800年頃の小説で、過去形使用が大幅に増える。	⑮3聖書では、過去形での使用が極めて多い。

Ⅲ 進行形となる動詞

1 自動詞・他動詞による分類

100例で使用される動詞は59種類ある。これを、進行形が現れはじめる聖書によって3分類し、さらにそれを自動詞・他動詞の別によって分けると、表3のようなになる。表3-1は動詞一覧、表3-2は頻度一覧である。表3-1で各動詞の後にあるカッコ内の数字は、用例数が複数となる場合の用例数を表す。また、同じ動詞であっても用例によって出現開始する聖書が異なる場合があるので、既に前の時期の聖書から出現している動詞は斜体字で示す。

表3-1 進行形として使用される動詞一覧(1)

進行形が現れる 聖書		K J B		R D B	
		R D B	W E B	W E B	W E B
動詞の種類		K J B		R D B	
		W E B	W E B	W E B	W E B
自 動 詞	変移動詞、移動を表す動詞	come, enter	come (2), set	<i>come</i> , die, get, go, part, pass	become (2), break, bud, <i>come</i> (5), <i>die</i> (2), draw, gather, <i>go</i> (8), grow (2), lay, lye, <i>pass</i> (2), recline (2), return, stand, travel
	精神活動、道徳的活動などの心的現象・感覚を表す動詞	pray (3), teach (2), wait	teach	marvel, preach, <i>teach</i> , <i>wait</i>	cry, hope, look (3) (「待ち望む」), <i>marvel</i> , mourn, <i>pray</i> , <i>wait</i> , weep
	発言を表す動詞	なし		speak (2), talk	<i>talk</i> (3)
	その他の動作動詞	cast		burn	force, govern, lead, sleep, take on
他 動 詞		untie, wash		preach, teach	be healed, bring, catch, command, do, expect, give, put, reason, release, ridicule, take, <i>teach</i> , tell, try, <i>untie</i> (2), waste, watch

表3-2 進行形として使用される動詞の頻度(1)

進行形が現れる聖書		K J B		R D B	
		R D B	W E B	W E B	W E B
動詞の種類		W E B	W E B	W E B	W E B
自 動 詞	変移動詞、移動を表す動詞	2	3	6	32
	精神活動、道徳的活動などの心的現象・感覚を表す動詞	6	1	4	10
	発言を表す動詞	0	0	3	3
	その他の動作動詞	1	0	1	5
他 動 詞		2	0	2	19
計		11	4	16	69

初期近代英語前期は特に自動詞での使用が大半といわれるが、3書比較でも同じことがいえる。自動詞では特に、変移動詞と心的現象を表す動詞が同程度に多い。なお、変移動詞が明らかに多いのは現代英語段階である。ただし、動詞の多様性、および他動詞の例を見るには、20世紀初頭のWEBまで待つことになる。他動詞では、自動詞ほどのグループ化特性は見られない。

2 状態動詞・継続動詞・瞬間動詞による分類

前節では、他動詞のグループ化特性が現れないことが明らかになった。そこで、Quirk *et al* (1985) (§ 4.28) の簡略型分類である柏野 (1999) の動詞分類を使って100例を再分類してみる。ここで使用するのは、状態動詞、動作動詞の別である。状態動詞は①から⑦に細分類し、動作動詞は継続動詞と瞬間動詞に分ける。継続動詞と瞬間動詞の分類基準は、WEBの用例で当該動詞句にfor句ないしはat句のいずれの時間副詞句を付加可能かによって、前者を継続動詞、後者を瞬間動詞とする。その結果を表3と同様にまとめたものが表4-1、4-2である。

状態動詞と動作動詞の別で比較すれば、全体の9割以上が動作動詞であり、状態動詞での事例は少数である。特にKJBでは動作動詞のみであり、状態動詞での用例がない点が特に目立っている。RDBでも状態動詞についてはKJBと同様の傾向がみられ、状態動詞の事例はそのほとんどがWEBによるものである。

表4-1 進行形として使用される動詞一覧(2)

動詞の種類		進行形が現れる聖書			
		KJB RDB WEB	KJB WEB	RDB WEB	WEB
状態動詞	① 精神的状態を表す			marvel	expect, hope marvel, mourn, reason
	② 感情(好き嫌い)を表す				
	③ 所有を表す				
	④ 知覚を表す				be healed
	⑤ 身体感覚を表す				
	⑥ 姿勢を表す				
	⑦ その他の状態を表す				become (2), grow (2)
動作動詞	継続動詞	pray (3); teach (2), wash, wait	teach	bum, pass, preach (2), speak (2), teach (2), talk, wait	cry, do, draw near, go on, govern, lay, lead, lie, look for (3), pray, recline (2), ridicule, sleep, stand, take on water, talk (3), teach, tell, try, waste, watch, weep, wait
	瞬間動詞	cast, come, enter, untie	come (2) set,	come, die, get near, go, part	break, bring, bud, catch, come (5), command, die (2), force his way, gather, give, go (7), pass (2), put, release, return, take away, travel, untie (2)

表4-2 進行形として使用される動詞の頻度(2)

動詞分類		進行形が現れる聖書			
		KJB RDB WEB	KJB WEB	- RDB WEB	- WEB
状態動詞	① 精神的状態を表す	-	-	1	5
	② 感情(好き嫌い)を表す	-	-	-	-
	③ 所有を表す	-	-	-	-
	④ 知覚を表す	-	-	-	1
	⑤ 身体感覚を表す	-	-	-	-
	⑥ 姿勢を表す	-	-	-	-
	⑦ その他の状態を表す	-	-	-	4
動作動詞	継続動詞	1	7	10	28
	瞬間動詞	3	4	5	31
計		11	4	16	69

おわりに

本稿では、歴史文法の進行形観と現代記述文法進行形観から見た動詞分類を使って、近代英語における進行形の使用頻度の拡張と特徴的な点をまとめた。自動詞・他動詞分類では、近代英語期の進行形は一般に変移動詞と運動動詞に多いと一般化されているが、心的現象・感覚を表す動詞にも多いことが分かった。また、状態動詞と動作動詞に分けることによって、動作動詞に大きく偏っている状況を確認することができた。

ところで、Quirk *et al* (1985) には、次のような重要な指摘がある。

It is important to note, also, that verb meanings can be separated only artificially, For example, the verb *write* occurring *in vacuo* cannot be classified; ... Quirk *et al* (1985: § 4.27)

動詞を分類するといっても、それは、事態概念の把握という視点で捉えることによって可能となる、と言えよう。概念主義的意味観は、そのような文法観の一つである。例えば、友澤 (2002) では、「非完結的事態概念」、「視界枠」、および「視点の局所化」といった道具立てを使って、進行形概念構造が整理されている。ところが、本稿で示した点を整理しようとするれば、たちどころに疑問が生じてくる。例えば、認知論で周縁的と捉える近接未来はKJBから現れるのであるから、歴史的变化の中では周縁的ではなさそうである。歴史文法との整合性の検討が求められる。

記述文法における進行形の文法記述は、当該形式の形式プロトタイプを明示しつつも、諸用法の列挙と例外的事例の排他処理という方法論をとる。意味の全体像を捉えるために諸用法を網羅的に扱いながらも、用法間の相互連関に関する議論が不十分で、本質論と周辺論の境目が捉え難い。それに対して概念主義的意味観に基づく文法記述では、ネットワークモデル等を使用して全体記述を志向する。言語形式が内包する外界解釈のあり方を記述に多く取り込む、意味に重点を置いた記述姿勢は、全体記述と用法間の相互連関の記述を主目的とする点で興味深い。

英語史における語彙、文法形式の諸変化を現代から遡って眺めるとき、いずれの変化においてもその背後に人間の外界解釈のあり方があることを感じさせられる。英語史記述においても、全体記述を志向した意味観に基づいた記述が求められてもよいはずだ。また、概念主義的意味観を認めようとするれば、その証左として歴史的变化を説明することも欠かせないものであろう。概念主義的意味観と歴史言語学の融合を志向するとき、検討課題は多々あるが、進行形問題はその一つと言える。更に多くの用例を使った観察が必要である。また、動詞システム全体からの考察についても、更なる考察が必要である。観察語彙対象と観察対象資料の幅を広げた考察が求められる。

参考文献

- 荒木一雄・宇賀治正朋. 1985. 『英語史Ⅲ A』 英語学大系10. 大修館.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken & Written English*. Longman.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge UP.
- Denison, D. 1998. "Syntax," in S. Romaine (ed.), *The Cambridge History of the English Language*. Vol. IV. Cambridge UP., pp. 92-329.
- 橋本 功. 1995. 『聖書の英語：旧約原典からみた』 英潮社.
- <http://ebible.org/>
- Huddleston, R. & G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge UP.
- Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV. George Allen & Unwin.

- 柏野健次. 1999. 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社.
- Leech, G. 1987. *Meaning and the English Verb*. (2nd ed.) Longman.
- 永嶋大典. 1988. 『英訳聖書の歴史』 研究社.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語史Ⅱ』 英語学大系9. 大修館.
- 大江三郎. 1982. 『動詞Ⅰ』 学校英文法の基礎4. 研究社.
- Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English*. Part II-II. Groningen: Noordhoff. Rpt., 千城, n.d.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. Longman.
- Rissanen, M. 1999. "Syntax," in R. Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language*. Vol. III. Cambridge UP., pp. 187-331.
- Scheffer, J. 1975. *The Progressive in English*, North-Holland.
- Strang, B. 1982. "Some Aspects of the History of the BE + ING Construction," in J. Anderson (ed.), *Language Form and Linguistic Variation: Papers Dedicated to Angus McIntosh*, Current Issues in Linguistic Theory 15. Benjamins, pp. 427-474.
- 鈴木英一・安井泉. 2002. 『動詞』 現代の英文法8. 研究社.
- 高橋 博 (訳) 1993. 『ゲルマン語・英語迂言形の歴史』 青山社. (Mossé, F. 1938. *Histoire de la Forme Périphrastique Être + Participe Présent en Germanique*, Collection Linguistique publiée par la Société de Linguistique de Paris, 42 & 43. Librairie C. Klincksieck.)
- 寺澤芳雄・船戸英夫・早乙女忠・都留信夫. 1969. 『英語の聖書』 富山房.
- 友澤宏隆. 2002. 「英語進行形概念構造について」西村義樹 (編) 『認知言語学Ⅰ：事象構造』 東京大学出版会, pp. 137-160.
- Visser, F. Th. 1973. *An Historical Syntax of the English Language*. Part III - II: *Syntactical Units with Two and with More Verbs*. E. J. Brill.